

おはようございます。2022年4月より本会第4代会長を務めております野村忠央でございます。第34回年次大会開催に先立ち、開催校も代表致しまして、一言ご挨拶申し上げます。

本日は年度末のお忙しい中、本日は4月の陽気とのことです。先生方には文教大学越谷キャンパスにご参集頂き、誠にありがとうございます。実は当初、2020年3月の第29回年次大会で本学文教大学での開催が予定されておりました。(本日、当日会員として参加してくれている文教大学の野村ゼミ生は当時はまだ高校生だったはずです。)しかし、その年2月の新型コロナウイルスの急激な拡大によって、開催可否の議論の末、残念ながら延期を決めた次第です。タレントの志村けんさん、女優の岡江久美子さんの訃報の後の国民全体のコロナ禍の苦労は先生方、みなさま、ご存じの通りです。本会も暗中模索の中、オンライン開催を4回実施しました。それから5年もの月日が流れたとは信じられない心持ちですが、当時はまだなかったこの14号館で対面開催の運びとなつたことをうれしく存じております。

さておき、この数年で本会も大きな変革期を迎えております。2年前の2023年1月に本会が日本学術会議協力学会研究団体に指定されたことは先年のご報告の通りです。そして、他学会では会員減少が深刻な問題となっている中、有難いことに本会は会員の入会が続き、現在138人の会員数となっております。また、本会が全国学会を歩むための残された重要な要件として、本会の論文のJ-STAGEへの論文のアップ作業、及びDOI(デジタルオブジェクト識別子)の取得に動くこととなりました。残念なニュースとしては、本会の学会誌『日本英語英文学』の出版を長年担って下さっていた賛助会員のDTP出版さんから、諸事情により学会誌の作成業務を辞退したいというお申し出がありました。2006年の第16号から18年の長きに亘り、記念号を含めて出版を担って下さったDTP出版さんに心より感謝申し上げたいと思います。本日は業務のため残念ながら出展されていませんが、新刊 *What Does Everyone Think? – Interactive Skills for Effective Discussion* をこの会場の後ろに展示しておりますので、ご覧頂き、近い授業をご担当の先生方には採用見本としてお持ち帰り頂いて構いませんとのことでした。そして、学会誌後任の出版社としては英語学、英語教育学等の出版で伝統がある開拓社さんに、新たな賛助会員としてお願ひすることになりました。本会が日本英語学会や英語語法文法学会などと同様、老舗の開拓社から出版できる運びとなつたことは、本会が全国学会の道を歩み始めた証左であると確信します。最新号第34号はまだみなさまのお手元には届いていないかと存じま

すが、本日、出展頂いている開拓社出版部の川田賢様に 34 号を先んじてご持参頂きましたので、休憩時間にぜひお手に取られて下さい。

本題に戻りまして、本日の第 34 回年次大会では英語教育学・英語学の領域横断的シンポジウムが 1 件、研究発表が 3 室に分かれ、英米文学が 2 件、英語教育学が 1 件、英語学が 6 件の計 9 件の発表が予定されております。大会当日に至るまで大会準備にご尽力下さった大会運営委員会の川崎修一委員長、関田誠副委員長、大会運営委員の先生方、及び事務局・広報委員の先生方、開催校協力委員の島野恭平先生に記して感謝申し上げます。本日は当日会員を含め、およそ 60 名以上の参加者が予定されております。司会者、発表者、会員の先生方にはどうぞよろしくお願ひ致します。

本会は来年、設立 35 周年を迎ますが、6 割の私立大学が定員割れとのニュースの中、大学も学会も厳しい時代を迎えております。そのような中ですが、どうぞ会員、役員のみなさまには、これまで以上に学会発表や学会誌投稿で本会を盛り上げて頂き、また本会を活用して頂ければと存じます。

以上をもちまして、大会のご挨拶に代えさせて頂きます。本日は最後までどうぞよろしくお願ひ致します。

2025 年 3 月 1 日（土）

日本英語英文学会長 野村 忠央